

最近、この学校は物騒だ。治安が悪い。

学校の治安が悪いと言えば、窓ガラスが割れるとか、トイレから煙草のおいがするとか、まあ普通はそういうものを思い浮かべるのだろうが、今回は違う。わが高校は、そのような方面で治安が悪いほどに偏差値が低いどころか、むしろ名門進学校と言っても差し支えない高校だ。極めてレベルの高い生徒自治が認められ、ちょっと過剰なくらいの自由な校風を以て、都内の私立高校でも一目置かれる名門だ。

ではなぜそのような名門で、治安がとても悪くなってしまったかと言うと、これは生徒会——生徒全員が生徒会の一員であるので正確には生徒会総務——のせいだろう。治安の悪いというのが具体的に何なのかと言うと、生徒会総務に対する不満なのだから。そう、わが学園はいま、生徒会総務に改革を求める生徒運動に直面しているのだ。

これは生徒会長の辻平悠丸が全面的に悪い。馬鹿、横暴、強権、私物化、大言壮語、巧言令色。尽きないほどにあいつの形容が思い浮かぶ。この中央委員会だって、いまや生徒会総務の傀儡みたいなものだ。

ここで、わが高校の生徒会構図について触れなければならぬ。当然のことながら、生徒会における最高の意思決定機関は生徒総会である。しかし、定例の生徒総会は年に一回しか開会をしない。だからその下には小規模の決定機関が設置され、生徒総会に上げる必要のない議題はこちらで討議される。これが中央委員会である。ここは、生徒会総務正副会長、会計監査本部部长、専門委員会事務会議議長、選挙管理委員会委員長、学級委員会から正副委員長、部活動連盟から体育系・文化系・音

楽系それぞれの代表の二人が委員として所属し、主に組織の活動報告や各組織単位では対応しきれない事柄を扱うのに使われる、いわば委員会の委員会である。

だから本来、意思決定という立場に立てば、中央委員の方が、生徒会総務を含めたすべての委員会に対して、優越しているはずだ。だがどうだろう。委員会には軽んじられ、生徒会総務には傀儡化され、そして生徒からは何をしているか理解してもらえない。これが中央委員会の現実だ。生徒からの無理解は、ある程度は仕方ない。何故なら中央委員会は、生徒一人一人に直接コミットするものではないからだ。体育委員会、整美委員会、風紀委員会、学級委員会。どれも直接生徒全員に関わる委員会だ。会計監査本部、選挙管理委員会。そして、生徒会総務。直接は関わらないかもしれないが、何をするかは思い浮かぶだろう。では、中央委員会はどうか。字面も災いして、具体的な仕事内容が全く思い浮かんでこない。しかも中央委員でないほとんどの生徒には、そもそも名前を知られることが少ない。だから、ある程度は、仕方ないのだ。ある程度は。

だが、そうだとしても、そういう生徒たちには主体的に知るといふ思考が備わっていないのではないかと思うことがままある。直接関わらないとはいえ、間接的には関わるのだ。それに対して無関心であろうとは、なんと意識の低い連中だろう。

そう言った連中は、生徒総会で寝たり、私語したり、誰かが拍手しているからとりあえず拍手したりする人間とほぼイコールである。どうせ、自分たちには関係ないとか、どうでもいいとか、自分が参加しようがしまいが何も変わらないとも思っている人間なのだろう。そんな奴らは生徒総会に寝に来るくらいなら帰ってSNSに盛

りに盛ったセルフイでも上げて寝ていれればいい。もつと言えば、生徒会総務のことを生徒会と呼ぶ人間も、一人残らず、意識低い予備軍だ。それはつまり、自分たちは生徒会の一員じゃないのだと思ってる証左だからだ。

そんなんで実際の国政がどうたらと言う。どんな厚顔無恥だろう。自分は何らかの巨大な組織に所属し、意見を発する権利を有しているという事に、彼らは本当は、思いを致していないのだ。

おっと、中学時代のことを思い出してしまっていた。その点では、この高校の生徒は優秀な方と言えるかもしれない。いまだ全面的な運動にはなっていないものの、急進組織が生徒会総務に改革要求を継続的に行っているし、新聞部が今週発行した新聞では、生徒会総務の現体制に何らかの不满を持つ生徒が全体の七割弱を占めていた。意識は高い。だが、不満なのは、われわれ中央委員会の役割と立ち位置を全くわかってくれないことと、それどころか、生徒会総務の下部組織か、あるいは生徒会総務のお仲間だと思われて、中央委員会まで非難の対象にしている点である。詳細のよく分からない相手を、調べもせずに思い込みと決めつけで叩いていること、そして顧みないことに、正義の改革組織を名乗る彼らの底の浅さが滲み出るが、現体制では仕方のないことではある。司会進行、決議、開催日程調整の全てを生徒会総務に握られているという点では、下部組織だと思われても文句は言えない。我々中央委員会も、この騒動に便乗して地位の改善を狙ってはいる。そういう意味では、私もまた、現状に不満と不信とを持ついち生徒だ。

だが、倒会は、これは絶対に防がねばならない。生徒会会則の規定により、生徒会総務のリコール等によって中央委員の改選が生じた場合は、現職の中央委員長以下

総務団は解任され、新たに選出しなおさなければならぬ。そうなるも、もちろん再選の機会があるとはいえず、少なくとも現状のように私まで悪の組織生徒会総務に与するヒールだと思われている状態では、潮流がそれを許さないだろう。常設の最高意思決定機関たる中央委員会が生徒会総務と運命を共にしないといけないなど馬鹿げた会則だが、悪法でも法である以上遵守する必要がある。私はこの椅子に汲々とする俗物だから、これは避けたいのだ。

どちらにせよ、今回の事態がそう大きくならないうちに、中央委員会独自で動く必要がある。生徒会総務の軛から解放されたうえで、生徒全体に存在感を示さなくてはならない。やりようによっては、募る不満をも、中央委員会が制御することさえできるだろう。

この学校には馬鹿しかいない。人間なんてものはみんな馬鹿なのかもしれないと本気で考えるほどに、この学校の生徒は間抜けばかりだ。

生徒会総務がなさなければならぬのは、あくまでも学校全体の利益を確保することである。もちろん、生徒の幸せと生徒運営上の目標が同一ならばよい。だが、往々にしてそうではない。その二つはしばしば対立してしまう。

であれば、生徒は所詮〇年しかいないのだから、生徒が入れ替わろうとも存続し続ける生徒運営というシステム自体の利益を優先した方がいいに決まっている。システム全体の利益が保証されれば、それは生徒会の運営が安定して行えるということに他ならず、最終的には生徒全体にもメリットとなる。

悪意で生徒会を運営する者はいない。生徒会総務に入ろうなどという時点で、仕事に忙殺される〇年間を歩む覚悟を決めたことと同義だ。

だが、生徒会総務に立候補しなかった者共はどうだ。仕事に身を捧ぐ覚悟もないで、しかも少しでも自分たちの不利益になりそうなことはすぐに反対します。

この学校は、約〇年前の生徒会長によって唱えられた「縁の下の生徒会」運動、要するに小さな政府ならぬ生徒会によって生徒活動の自由が大きく広がった。同好会成立要件の緩和などから始まったこの政策は、最終的には半世紀の歴史を誇る創立以来の制服をお払い箱へと追いやった。

この私だったら絶対にやらないが、ある程度の効果は

あつた。特に同好会の多さは多様性の象徴としておおいに喧伝され、受験倍率の増加と学校イメージの定着に貢献した。

だが、15年も経てば同好会は乱立、活動実績のないどころか部員すら1人のみという有様すら珍しくなく、3代前の生徒会により実体のない同好会を一扫。そして、本丸たる制服の復活も先代が成し遂げた。

そんなこんなで、「生徒会はここ数年、生徒の自由を制限することばかりしている」。それが、今の生徒会に不満を持つ者の言い分だ。藁人形と言えいいのか、論点すらもしいところ。

そんな奴らはみんな馬鹿だし、それに踊らされて生徒会に不満があるのだと思わされている一般生徒も同様に馬鹿だ。

目障りなものには消えてもらうに限る。彼らを何とかしてつぶさなくてはならない。場合によっては、言論統制に近いこともしなければならぬ。既に副会長の鳩森小郷に言つて委員会に通す準備をさせている。委員会は明後日だ。来週には連中は活動を禁止された違法集団になり下がるだろう。

全体を壊すようなら、自由も思想も最初から持たせる価値はないのだから。

第六回中央委員会の明後日に迫る放課後。議題は例の生徒会の抜本的改革を求める勢力についての対応だ。生徒会総務の従来の姿勢は、そもそも生徒会運営において

早急に改善すべき問題はないという立場であるがゆえに、一連の生徒会改革運動にはなんらの対応も講じないというものだ。委員長：初原先輩の予想通りならば、生徒会総務はその従来の姿勢を崩さないだろう。僕もそう思う。だが、これが生徒会総務の意見なのか、それとも辻平先輩個人の意見なのか、それは分からない。辻平先輩はそういう人間だ。

「あいつは馬鹿だが無能とはちよつと違う。一貫した思想があり、それに準じて行動しているからね。彼なりの方法で、彼の定義するよりよい環境を創ろうとしている。それが他人からすると絶望的に受け入れ難いものであるだけさ」

初原先輩が僕の不満を聞いてフオローなんだかそうじゃないんだかわからないことを言った。

「会長もちよつと譲歩とか歩み寄りとか、そういう概念があればいいんですけどねえ」

そう言いながらも一人の副委員長、高橋天海が淹れたてのコーヒーを初原先輩の机に置いた。初原先輩は普段はその辺に売つていて中央委員会室に常備してあるスティックコーヒーならなんでも飲むが、機嫌がいい時だけは紅茶を飲みたがる。しかも銘柄は日東のティーバッグ、砂糖はスティックで二本と指定して、僕と高橋さんは四月の時点で中央委員会に關係する各生徒会則と一緒に覚えさせられた。

初原先輩は明後日の委員会で、中央委員会の状態改革を求める提案を出す予定だ。そのために、ずつと何を得られるか考えているらしい。初原先輩が改めて机に中央委員一覧表を広げる。それを高橋も一緒に持って、三人でのぞき込む。

委員長	部活動連盟	文化系代表	初原	紗穂
副委員長	会計監査本部	本部長	高橋	天海
副委員長	学級委員会	副委員長	錦部	和彰
委員	生徒会総務	会長	辻平	悠丸
委員	生徒会総務	副会長	鳩森	小郷
委員	専門委員会事務会議	議長	夏島	徹
委員	専門委員会事務会議	副議長	原	真衣花
委員	学級委員会	委員長	久保田	律樹
委員	選挙管理委員会	委員長	笹倉	凧
委員	部活動連盟	体育系代表	赤城	龍之介
委員	部活動連盟	音楽系代表	若宮	聖

当然ではあるのだが、改めてこの名簿を見ると、こ

の委員会がとんでもなく重要なものであることを感じる。生徒会長がただの平委員なのだ。ほかに、委員の名簿はとんでもなく重要な役職である人間が集まりに集まっている。その中で互選によって選出された僕たち議長団は、それだけ責任の重い役職だ。

僕だって学級委員会副委員長、第一学年の顔だし、高橋さんに至っては会計監査の長、選挙で選ばれたVIPだ。学年的には先輩なのが先輩とは呼ばせてくれない。会計監査として、なんとかして生徒会長の不正な金の流れを突き止めると日ごろから言っているが、毎日意気込んでいるということはつまり、何も進展がないということだ。

「票を確保するためには、賛同者を得なければならぬ。高橋、錦部、どうだい。どこなら賛同が得られそうだ」
初原先輩が言う。大体こういう風に意見を求めてくるときは、自分ですでに答えが決まっているが、無理やり僕に経験を積ませるためのものだ。そう、この人は既にある程度僕を後任として見据えている。地位の改革がうまくいかなかったとき、その思いを託すためだろう。「生徒会総務はちよつと無理でしょうね。鳩森さんはわからないですけど、辻平会長の影響がちよつと強すぎるから」

先に口を開いたのは高橋さんだった。自分もすぐに続ける。

「うちの委員長……久保田先輩は、どっちでもいいって感じですかね。」

なるほど、と言って、キャスターの椅子を回し背中を向けてつぶやいた。

「不確定だな。どうしたものか……」

この学園のように生徒自治が確保されすぎてしまった高校にとつて、生徒会とはひとつの国だし、総務は内閣だ。そして新聞部は、いわゆる第四の権力ということになる。一般生徒の日常を、誰かの不祥事を、文字として記事にする、そういう仕事。そういう意味では、俺達は、一連の生徒会改革運動には積極的に関わっていくべきなのかもしれない。

実際、70年の校史において、さまざまな動乱があったが、生徒会の弾劾だけは一度も起こったことがない。史上初・弾劾された生徒会長の称号は、恐らくこのまま事態が悪化すれば辻平悠丸に与えられるだろう。学校の歴史を一般生徒目線から綴る団体として、これにスポットを当てない選択肢は、本来はあり得ないのだ。

だけど、それを躊躇させる情報が、いまの俺には二つある。ひとつは、簡単に言えば、ここが学校で、俺が人間だということ。この倒会が成されたときに巻き込まれる中央委員長初原紗穂は、同じクラスの親友なのだ。いくら国のような生徒自治があったとしても、学校は学校。コミュニティとして狭いし、国にはないクラスという概念がある。親友たる初原を新体制下の鼻摘み者に追いやることは、表には出していないものの内面は心苦しい。

でもそれは非情に徹すれば問題のない話で、もうひとつの方が本当に問題なのだ。この学校にだって、裏とか聞はある。新聞部の部長として、それは痛いほどわかっていることだ。生徒会長の着服疑惑はほぼクロということまで持ってきているが、そんなことはどうでもいい。

一般生徒の中だ。もちろん、一般生徒は聖人ではない

から、テストの横流しみたいな笑えるものから、飲酒に喫煙まで、多くはちよつとした悪事に手を染めている。そして、悲しいかな学校とはどこまでも社会の縮図、そういう悪事の元締めみたいな連中がいる。とうてい笑えない本当の犯罪まで見え隠れする、とあるグループ。要するに不良の一派。番長みたいなものだ。

既にこいつらを追ってからしばらく経つ。かなりの情報もそろえた。だがつまりそれは、それ以上踏み込んだら、俺の身の方が危ないということでもある。消されるというよりは、表通りを歩けないと言った方がいいのかもしれない。

ともかく、それと倒会運動がどう関係があるかという点、これは単に、倒会運動と、不良グループに何らかの関係がある疑いが濃いというだけだ。倒会運動——彼らは何かの頭文字を取って『ARTISTS』と名乗っている——の副リーダーにして校内有数のプレイボーイの木島という男は、不良グループの参謀である。2グループ間での人員の供給、活動の宣伝といった事柄には、高い確率でかかわっていることだろう。

不良をつぶすためにはARTISTSの敵に、生徒会をつぶすにはARTISTSの味方にならなければならない。この立場の危うさこそが、新聞部に課せられた難題だ。

我々は新聞部の精神と使命に賭けて、勝ち馬に乗らなければならない。

中央委員長の椅子。小学校の担任が教室の中に置いて
いるような、ただの机からはグレードアップしたデスク
だ。椅子も硬いが回る。この椅子に座るのももう四、五
か月目と言ったところで、ここで普段は無為ながらも邪
魔の少ない放課後を送るのが私の愉しみなのだ。今日は
錦部も高橋も早々に帰りたいと言っていたし、中央委員
室には誰もいない。

中央委員の長として与えられたのは、ただこの部屋に
籠りこの椅子にふんぞり返ることだけだった。本来の仕
事には程遠く、しかもそれを看過しているだけの五か月。
あまりにマイミな現状、それなのにミニイふりをする。
だからマイな生活を送れているのだと、こゝ最近は毎日
のように自嘲している気がする。

委員会は明日だが、どうにも情勢が芳しくない。確実
に勝てるの見込めない。ということは、採決前の説明で
一人でも多く説得させるほかはないから、原稿を書くた
めにこの部屋に籠っている。

だが、どうにも集中ができない。外が今日はやけに騒
がしい。応援団か音楽か。確認のために、窓の方へ向か
って歩きつつ、声に耳を傾ける。

「……！ ○×××——！！」

拡声器だった。そして、『その単語』を聞く。

とんでもないことが起こっているかもしれない。

すぐに外に出て、階段を駆け下りる。上履きなものも忘
れて、夢中で人だかりめがけて走った。

人だかりの最後方には、新聞部の啓希がいた。カメラ

を構える先には、朝礼台の上で拡声器を持つ男がいた。
啓希は私を認めると、

「——初原。遅かったな」

と、苦々しい顔を浮かべて言った。その言い方から、
二重の意味があるとすぐに分かった。

そうだ。さつき、拡声器で聞こえてきたその言葉は。

「お、おい啓希。これは一体、『打倒』ってまさか——」

言い切る間もなく、拡声器から声が発された。力と意
志のこもった、はっきりとしたものだった。

「改めて申し上げますと、これは決して革命の扇動で
はないのです。これは我々という存在の周知と、現状へ
の理解の補助、そして、我々、『ARTISTS』が今、
この瞬間、かの生徒会という悪の組織に対して、蜂起す
るといふ事実を、暴虐に対するささやかな抵抗の宣言を。
それだけを目的に、私は今ここに立っているのです。」

我々は芸術家でありませぬ。親愛なる聴衆の皆さん！
あなた方が理想と感ずる校内環境を、いま、想像してい
ただきたいのです。それは現状とどれほど乖離してい
るのでしょうか？ 我々は、それを是正するための芸術家
なのです。そちらのあなたが、あちらのあなたが、いま
理想として希う。そんな仄かな憧憬を、手繰り寄せる為
の機関に過ぎないのであります。この学校に新たな絵を
描く——皆さんの理想の集まり、それをこの地に描くの
であります。

さあ、皆さん！ 理想を汚す邪魔者にはぜひとも退
場いただくではありませんか！ 我々にはその力がある
のです。皆さん一人一人の心臓に、確かに、そう確かに
宿っているのであります。

団結、そして打倒の時です！ 理想の為に、団結しな
ければならないのです！」

そう叫ぶ男こそ、生徒会改革運動——いや、もはや倒
会運動と呼ぶべきだろう——の首魁、神沢吉郎だった。
黒山の人だかりはうねる様な熱気を見せ、歳兼の言葉に
同調していることは疑うべくもなかった。背中を一筋の
汗が走り、その冷たさに身震いをする。隣にいた啓希が、
面倒なことになったけどどうするんだよ、とでも言いた
げな顔でこちらを見ていた。私が聞きたい。

神沢は演説を終えると、演壇を降りて、校舎の方へと
戻っていく。もみくちゃにされないようにと『ARTI
STS』とやらの構成員達がオーディエンスの神沢に近
付こうとするのを留めている。

この時確かに、穏健だった改革要求は、勢いを持った
大動乱へと昇華したのだった。

続